

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K16784

研究課題名(和文) ブロンテ姉妹と1945年以降の英国女性文学

研究課題名(英文) The Bronte Sisters and British Women's Literature Since 1945

研究代表者

小田 夕香理(Oda, Yukari)

富山大学・学術研究部芸術文化学系・准教授

研究者番号：70511880

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1945年以降に発表された、英国の女性作家たちによる、ブロンテ姉妹に関連する作品を分析することにより、ブロンテ姉妹というヴィクトリア朝の女性作家の作品や人生が、女性の社会進出が進んだ20世紀の中盤以降においても、様々に書き直される理由の解明を試みた。1945年以降、英国の女性作家たちが、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』とエミリー・ブロンテの『嵐が丘』を、その時代に相応しい形で作品に取り入れてきたことが明らかになったこと、これら二つの作品には、それを可能にする普遍性と特殊性があることを確認できたことが本研究の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、英国文学史のなかに『ジェイン・エア』と『嵐が丘』に関連する1945年以降の英国女性作家の作品の系譜を見出し、女性の生き方の問題を中心とした普遍の要素が、現代の英国の女性作家たちにこれらの作品を書き直させているのだという結論に至ったことにある。また、これらの作品の普遍性を知らしめているのは、ブロンテ姉妹の作品と人生が混ざり合っって人々を魅了するという特殊性であるという考察にも、学術的意義が見出される。

研究成果の概要(英文)：In this research, by analyzing British women's literary works since 1945 that are related to the Bronte sisters, I attempted to clarify the reasons why the works of the sisters, Victorian women writers, and their life stories had been variously rewritten, even after the mid-20th century, when women's social progress advanced. Consequently, it was demonstrated that, since 1945, British women writers rewrote Charlotte Bronte's Jane Eyre and Emily Bronte's Wuthering Heights in their works in ways corresponding to their ages, and it was made clear that these two works possess universality and particularity that enable them to do it.

研究分野：19世紀以降のイギリス小説

キーワード：ブロンテ 英文学 女性文学 20世紀 ヴィクトリア朝 英国 イギリス 19世紀

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ブロンテ姉妹の作品と人生

イギリスの女性作家である、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55)、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48)、アン・ブロンテ (Anne Brontë, 1820-49) のブロンテ三姉妹の作品には、伝記的な事実とともに理解される傾向が強いという特徴がある。女性が作家となって作品を発表することは、ヴィクトリア朝の男性中心社会においては、社会規範からの逸脱とされていたのであり、このような状況のなかで、ヨークシャーの田舎に暮らす三人姉妹が、シャーロットの『ジェイン・エア』(Jane Eyre, 1847) やエミリーの『嵐が丘』(Wuthering Heights, 1847) をはじめとする、人々に衝撃を与える斬新な作品を発表して文壇を騒がせたこと、また、姉妹がみな若くして命を落としたという事実は、彼女たちが発表した作品に劣ることなく劇的なものであった。ゆえに、ブロンテ姉妹の人生は伝記作家たちの関心を引き起こすこととなり、エリザベス・ギャスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の『シャーロット・ブロンテの生涯』(The Life of Charlotte Brontë, 1857) をはじめ、多くの伝記作品が発表されるに至った。ゆえに、彼女たちをブロンテ姉妹たらしめているのは、彼女たちが発表した刺激に満ちた作品と、彼女たちの数奇な人生であると言える。そして、それらは密接な繋がりをもつものとして人々に認識されているのである。

(2) ブロンテ姉妹の作品の再生産

ブロンテ姉妹の作品は、様々なメディア(小説、映画、テレビドラマ、演劇、バレエなど)で再生産されている。これは、彼女たちの作品と人生に関心を持った後の時代の人々が、彼らの観点から彼女たちの作品を捉え直し、新たな物語を生み出していることを意味している。そして、文学作品においては、特に女性作家たちが発表する作品において、ブロンテ姉妹の作品や人生は様々に書き直されている。パッツィ・ストーンマン (Patsy Stoneman) の *The Brontë Transformations: The Cultural Dissemination of Jane Eyre and Wuthering Heights* (Prentice Hall/Harvester Wheatsheaf, 1996) 以降、ブロンテ姉妹の作品の再生産を取り上げる研究は増加したが、それらの多くは映像や舞台への翻案について分析を行うものであった。ブロンテ姉妹の作品を書き直した作品については、ジーン・リース (Jean Rhys, 1890-79) の『広いサルガッソーの海』(Wide Sargasso Sea, 1966) など、一部の作品については詳細な分析がなされてきたが、その他の作品については、ブロンテ姉妹の作品に関連をもつ作品であることが指摘されるのみである場合も多く、詳細な分析がなされないままとなっているものが非常に多く見られた。

(3) 本研究の意義

上記のように、ブロンテ姉妹の作品を書き直した文学作品についてはまだ十分な分析が行われていない状況であったため、本研究では、ブロンテ姉妹の作品と彼女たちの人生が、英国の女性作家の文学作品のなかでいかに新しい物語として書き直されてされているのかを、統括的にかつ詳細に分析することとした。研究対象を 1945 年以降の英国の女性作家たちによる作品に限定したのは、女性の居場所は家庭であると考えられていたヴィクトリア朝の女性作家であるブロンテ姉妹の作品と彼女たちの人生が、女性の社会進出が大きく進んだ第二次世界大戦終了後の英国において、特に女性作家たちの作品のなかで依然として取り上げられている理由を解明することに研究の意義があると考えたためである。

2. 研究の目的

本研究では、ブロンテ姉妹というヴィクトリア朝の女性作家の作品や人生が、女性の社会進出が進んだ 20 世紀の中盤以降においても、英国の女性作家たちの作品において様々に書き直されている理由を解明することを目指した。

まず、ブロンテ姉妹の作品や、姉妹の伝記的要素との関連が見られる 1945 年以降(第二次世界大戦後)の英国女性作家の作品を、英国社会の変化に照らして年代別に分析し、それらの作品においてブロンテ姉妹の「人生」や作品がどのような意味をもつのか考察することで、ブロンテ姉妹が戦後の英国女性文学において担ってきた役割とその変遷、女性の人生や女性作家のあり方についての新旧の価値観の相克を解き明かす。その上で、戦後の英国文学史とブロンテ姉妹に関連する作品の系譜を対比させることにより英文学史の流れを見直すことを最終的な目標とした。

3. 研究の方法

(1) 研究対象とする作品の選定

1945 年以降に発表された、英国の女性作家による、ブロンテ姉妹に関連をもつ作品を探索するため、参考文献・資料を収集し、研究対象とする作品を選ぼう作業を行った。この作業は初年度に集中して行ったが、その後も年度の初めに行い、まだ把握していない作品がないか、新しく発表された作品がないかを確認し、研究対象とすべき作品の追加や見直しを行った。その結果、非

常に多くのブロンテ姉妹関連作品が確認されたため、英文学史の流れを見直すという目標を鑑みて文学的価値を重視して研究対象とする作品を選ぶこととし、すでに一定の評価がある作家の作品や、ブロンテ姉妹の人生や作品を取り入れつつも、その作家独自の物語を展開するものを選定することとした。

(2) 作品の分析

シャーロットに関連する作品が多く選定され、その中には英文学史上重要な作家の作品が多く見られたため、ブロンテ姉妹関連作品を年代別に分析するのではなく、シャーロット関連の作品のうち、重要度が高いと考えられるものから分析に着手し、その後、エミリに関連する作品の読解・分析へと進んだ。アンに関する作品については、その評価と作品数の少なさ、そして時間の制約を考慮し、分析は行わないという判断に至った。また、各作品の分析を進めるにあたっては、ブロンテ姉妹の作品を都度精読し、精緻な比較分析となるよう努めた。また、作品の分析に必要な文献と、19・20世紀英国の文学と社会に関する文献を収集・分析し、研究成果の充実に努めた。

4. 研究成果

この研究を通して得られた成果としては、(1)1945年以降、英国の女性作家たちが、その時代に相応しい形で、シャーロットの『ジェイン・エア』とエミリの『嵐が丘』を作品に取り入れてきたことが明らかになったこと、(2)『ジェイン・エア』と『嵐が丘』には、それを可能にする普遍性と特殊性があることを確認できたこと、の2点がある。

(1) 時代に相応しい形で『ジェイン・エア』と『嵐が丘』を取り入れるということ

アニータ・ブルックナー (Anita Brookner, 1928-2016) の『秋のホテル』(*Hotel du Lac*, 1984) に読み取ることができたのは、「時代に置き去りにされたヒロイン」であった(小田 2019, 170)。ヒロインは、女性の社会進出が認められるようになった20世紀後半において女性小説家として成功を収めるが、彼女は「女性の幸せ」とは結婚であるというヴィクトリア朝的な価値観に囚われている。この作品において、『ジェイン・エア』の要素は、20世紀のヒロインの内面を支配するヴィクトリア朝の価値観を示すものとなっているが、ヴィクトリア朝の価値観を示すために『ジェイン・エア』を用いるという手法は、マーガレット・ドラブル (Margaret Drabble, 1939-) の『滝』(*The Waterfall*, 1969) にも共通している(小田 2019, 170)。ヴィクトリア朝の女性の生き方を『ジェイン・エア』を通じて示し、現代の女性の生き方に照らして新しい指標を示すというのが、ブルックナーやドラブルらが行ったことであり、本研究で分析した他の女性作家の作品においても、『ジェイン・エア』の要素は、概して女性の生き方を読者に考えさせる役割を担っている。

しかし、ダイアン・セッターフィールド (Diane Setterfield, 1964-) の『13番目の物語』(*The Thirteenth Tale*, 2006) においては、『ジェイン・エア』と『嵐が丘』は過ぎ去った「過去」を象徴するものとなっている(小田 2021, 27-29)。発表されてから150年以上の時を経て、これらの作品は、ヴィクトリア朝の価値観を示す役割だけでなく、「過去」の小説として、「過去」そのものを示すという役割を担っているのである。

(2) 『ジェイン・エア』と『嵐が丘』の普遍性と特殊性

(1) で述べたように、『ジェイン・エア』は、1945年以降の英国の女性作家たちの作品において、ヴィクトリア朝の価値観を示す役割を担ってきた。「女性がどう生きるか」という問題は、女性たちの普遍の関心事として、現代においても女性作家たちの作品に描かれており、それらの作品に『ジェイン・エア』の要素が登場しつづけるのは、『ジェイン・エア』が「女性がどう生きるか」という普遍のテーマを示す作品として明確に認識されていることを示している。

また、セッターフィールドの『13番目の物語』においては、『ジェイン・エア』や『嵐が丘』の要素が入り組んで存在し、この作品の劇的な展開に貢献している。この作品は、「19世紀という過去の小説に描かれる人間の経験や感情が、現在においていかに読者に訴えるものであるのか、現在の小説にいかに新たな側面を加えうるものであるのかを指し示している」(小田 2021, 29)のであり、『ジェイン・エア』や『嵐が丘』は、「人間の経験や感情」といった普遍のテーマをもってこの作品に貢献しているのである。

総じて、1945年以降の英国の女性作家たちの作品において『ジェイン・エア』と『嵐が丘』が書き直され続けるのは、「女性がどう生きるか」という問題や、「人間の経験や感情」を含む普遍のテーマがこれらの作品に見出されるためであり、現代の女性作家たちはそれらをさらに時代に相応しい形で発展させようとしてきたのである。そして、人々に『ジェイン・エア』や『嵐が丘』への関心を抱かせ、これらの作品の普遍性を示し続けるのは、ブロンテ姉妹の作品が彼女たちの人生と切り離せないものとなって人々の関心を呼び起こすという、彼女たちにまつわる特殊性なのである。

<引用文献>

小田夕香理「アニータ・ブルックナー 『秋のホテル』にみる現代女性の苦悩 ロチェスター不在の『ジェイン・エア』を読む」『めぐりあうテキストたち ブロンテ文学の遺産と影響』

春風社、2019年。
小田夕香理「『13番目の物語』にみる『嵐が丘』と『ジェイン・エア』、『ブロンテ・スタディーズ』第7巻第1号、2021年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小田夕香理	4. 巻 7
2. 論文標題 『13番目の物語』にみる『嵐が丘』と『ジェイン・エア』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ブロンテ・スタディーズ	6. 最初と最後の頁 17～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57383/brontesocietyjapan.7.1_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小田夕香理
2. 発表標題 『嵐が丘』を「記憶」から読む キャサリンとヒースクリフを中心に
3. 学会等名 日本ブロンテ協会2022年第37回大会 シンポジウム「ブロンテ文学と記憶」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小田夕香理
2. 発表標題 『夜ごとのサーカス』と『ジェイン・エア』
3. 学会等名 日本ブロンテ協会関西支部2023年大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小田夕香理
2. 発表標題 『13番目の物語』とブロンテ姉妹の小説
3. 学会等名 日本ブロンテ協会関西支部2021年大会（オンライン大会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小田夕香理
2. 発表標題 アイリス・マードックの作品に読むブロンテ的要素
3. 学会等名 日本アイリス・マードック学会第21回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小田夕香理
2. 発表標題 時代から隔たるヒロインたち Margaret DrabbleのThe Millstone とThe Waterfall を中心に
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第68回大会 シンポジウム『20世紀イギリス文学にみる自己と社会』（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 惣谷美智子、岩上はる子、新野みどり、皆本智美、大田美和、天野みゆき、木村晶子、市川薫、小田夕香理、木梨由利、山内理恵、江崎麻里、田村真奈美、長柄裕美、市川千恵子、真鍋晶子、金丸千雪、川崎明子、奥村真紀、仙葉豊	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 432
3. 書名 めぐりあうテキストたち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------